

絶滅か再生か・釜無, 入笠山 アツモリソウの危機

名 取 陽*

ふるさとの山に咲くアツモリソウ

釜無山や入笠山には、少年の頃（昭和20年～30年）、6月、山ブキを採りに谷に入れば、あちこちにアツモリソウの紅い花が咲いていた。

カッチキ（刈敷：稲作の肥料として、里山から採取して、水田に入れる広葉樹の若枝・葉）取りに山に入ると見られるので、カッチキ花と呼んで親しまれていた。

田植えの時期になると、山から移植されたそのカッチキ花が、あちこちの農家の庭先でも、濃紫色の花をにぎやかに咲かせていたものであった。

その後50年、郷里に定住し、ほっと一息して里山を見回ると、そこにはアツモリソウはおろか、カタクリやサクラソウ、オミナエシまでも消失してしまっていた。むろん、実家の庭のアツモリソウも世話する人もなく、消滅してしまっていた。

植物の生態を調査研究してきた者として、この実状を目の当たりにし、自責の念とともに何かしなくてはいけないと考えるようになった。

希少野生動植物保護条例

ちょうどその年（2004年1月）施行された、長野県希少野生動植物保護条例による保護監視員として、郷里の植物の保護活動に参加することになった。

5月より連日、釜無山、入笠山の谷や尾根を、アツモリソウの花を求めて歩きまわった。

釜無山の石灰岩地域の林道では、多数の山菜取り（自称）の人々と出会い、山野草の盗掘者では？との疑心を抑えつつ、アツモリソウの自生や保護を話題にしてきた。多くの人々から、「なんで今頃アツモリソウ保護なのか、もうとっくにこの山城では絶滅してしまったよ。今から30年前ならまだしも、今頃何を…」と笑われ、悔しい思いをしたものであった。

そんな筈はなかろうと、その後も獣道をたどりながら、幻のアツモリソウを探し回る日々が続いた。

しかし、はっとして出会うのは、その葉がよく似た

コバイケイソウばかりで、そのコバイケイソウの葉までも食べ荒らしているシカ害のひどさにも驚かされた。

翌年もあきらめ切れず、さらに人里離れた山奥を探ったものの、出会うのはカモシカやシカの白骨ばかりで、アツモリソウの花は幻のままであった。

富士見町アツモリソウ再生会議の発足

ちょうどその頃、町役場の「新しい町作り係」伊藤一成氏から呼びかけがあり、アツモリソウをよりどころにした町作りのプロジェクト計画に参加することになった。それは、次のような内容であった。

- ・釜無産のアツモリソウの総合的な保護施策を推進し、それを里山、ひいては町再生のシンボルとする。
 - ・野生のアツモリソウを見つけその自生地を保護し、山野草がかつてのように咲き誇る里山を再生して次世代に継承する。それを小中高校の教育活動の一環としても位置づける。
 - ・アツモリソウを園芸的に町の特産品化して、地域の活性化を目指す。
 - ・そのために次の3つを柱とした官民一体のアツモリソウ再生会議を発足する。
- ① アツモリソウの自生地の発見とその保護。…町内の自然研究家、自然愛好者を中心に。アツモリソウの自生地を見つけ、立ち入り禁止地区を指定し、町植物保護条例を施行し、保護監視活動を行う。
 - ② アツモリソウの里山自然公園作り…町内の園芸家、園芸愛好者を中心に。栽培されてきた地元原産のアツモリソウを増殖し、それを植えた公園を作り町民の拠り所とする。
 - ③ 地元原産のアツモリソウ苗の無菌培養生産、販売…町内の園芸ラン苗生産会社を中心に。大量生産により価格破壊を起こして山採りの撲滅を目指す。
- ・事務局を町役場に置き、国および県の担当者、大学・研究機関の研究者にも参加、援助を求める。
- 以上、良く練られた計画であった。

* 名取 陽 〒399-0211 諏訪郡富士見町富士見3011-1

町・住民ボランティアによる自生地調査

再生会議の発足により、アツモリソウ保護の取り組みが始まった。自生のアツモリソウがあつてこそと、まず町内の自生地調査が開始された。

2006年5月～6月、熱心な町民ボランティアによる苦心の探査の結果、釜無山～入笠山で7株2花の自生アツモリソウを発見することができた。

釜無のアツモリソウは、園芸的にはカマナシホテイアツモリといわれ、その艶やかさで全国のマニアに人気が高く、1株数十万円の値段がつき、盗掘者が後を絶たず、自生地釜無ではすでに絶滅してしまったといわれていた。地元の山の事情に詳しい人々に聞いても、「1980年代の中頃には、それまでは広葉樹林縁の日当たりの良い場所で普通に見られていたものが、すっかり消えてしまった。以降自生しているアツモリソウを見た人はいない。」とのことであった。



自生地で咲くアツモリソウ (2006年6月釜無)

今回、多数の人々の協力により発見されたことは素晴らしいことであり、またその経過は、「町民みんなの貴重なアツモリソウ」という位置づけを作ることにもなった。

人里はるか離れた深山の樹陰でひっそりと咲くアツモリソウは、神秘的で美しく、また、さびしげであった。

その生育環境は、広葉樹を中心とした安定したものであり、生態系にしっかりと組み込まれていたからこそ守られたものであり、また人間からも隔離されていたからこそ生き続けられたものであった。この消滅寸前のアツモリソウをその生態系まるごと、保存していくことの大切さ、困難さを考えると身震いする思いであった。

アツモリソウの保存

町をあげてアツモリソウを保存したいという気運の要因として、今まで庭先で普通に見られていたこの花が、減少してきているということもあった。山の自生株がなくなり、山採り補給が途絶え、株分けの連続による無性生殖で、生命力の減少が起きたとも考えられる。

また、夜間や留守中に、庭先からアツモリソウが残らず盗まれてしまったという話もちこちで聞かれ、危機意識が高まったとも思われる。

園芸愛好者による盆栽の展覧会が催され、栽培技術の勉強会により情報を提供しあったり、受粉による種子増殖を試みたりして、園芸的なものを含め町のアツモリソウを大切に保存しようという意識が住民の間で高まってきたことは確かである。

無菌培養によるラン科植物の増殖研究者、三吉一光博士(秋田大学)やアツモリソウの生態研究者、横山潤博士(山形大学)の講演会が開催され、町民の関心が高まり、アツモリソウ再生についての意見もいろいろ寄せられるようになった。

園芸種のアツモリソウを見慣れている人が、人里離れた自生地でひっそりと咲く花を見つめて、「野のものは野にいてこそ美しいなあ…」としみじみと発した言葉には実感がこもっていた。

アツモリソウの再生事業が、自生種の保護・増殖をぬきにして園芸的にのみ行われることは問題であり、本末転倒であることは言うまでも無い。

事務局では、それを考慮して、園芸的に使われている種名カマナシホテイアツモリではなく、本来の種名である、アツモリソウを用いて再生に取り組んでいる。

アツモリソウに関わる住民の多様な関心を1つにまとめて町のプロジェクトとして位置づけるために、2007年5月には「どう守る富士見町のアツモリソウ」と題して、町民むけのパネルディスカッションを開催した。パネリストは元島清人(中部森林管理局)、山口和茂(長野県生活環境部)、中山洋(中山植物園)、渡辺一夫(ニチレイフラワー事業部)、横山潤(山形大学)、三吉一光(秋田大学)の6氏であり、小さな町のイベントとしては異色で内容の濃い充実したものであった。

むろん釜無・入笠山自生のアツモリソウの保全が話の中心となり、7株にまで減少してしまった種の保存が可能かどうか、野生株の人工授粉の可否、シカ害か

らの保全、盗掘防止、保護条例施行、栽培株の保存増殖法、無菌培養による増殖法など内容は多岐にわたった。

アツモリソウの絶滅危機をまねいた原因

標高1000m、富士見町の高台から眺める展望は、雄大で美しく息をのむ思いである。

南に高い富士山を基点に、甲斐駒岳、北岳、木曾駒岳、御岳、乗鞍岳、穂高岳、槍ヶ岳、鹿島槍岳、白馬岳、妙高山、八ヶ岳、金峰山と日本中央高地の山なみをぐるりと一望の下にすることができる。

日本に自生するアツモリソウは、現在わずか600株と推定されている。そのうちの何株が、この日本中央高地の山中に自生しているのであろうか。

富士見町の西域、釜無山～入笠山の山中には7株、2花のアツモリソウが自生していることが確認された。

古、中生層の石灰岩、変成岩の土壤に育まれてきたアツモリソウの花は、深い濃紫色で、大きさ5 cmほどの見事なものであった。

しかし、ひっそりと咲く花の周囲には、ポリネーターのマルハナバチの訪れる気配はまったく無く、受粉による種子生産、自然繁殖は望めない状況であった。

このままでは、いずれ絶滅する可能性がきわめて高いと考えられる。

絶滅危惧種に関わる種の保存法に基づき、環境庁の許可を得て、自生地での人工受粉による種子生産の実施が強く望まれる。

かつて富士見町の山中で無数に咲いていたアツモリソウが、なぜこのような状況になってしまったのかその原因を考える時、まずあげられるのは戦争の影響である。

1945年～1960年戦後の住宅再建のために木材需要は急増し、釜無～入笠山の東麓の山林はすべて伐採された。無惨に丸裸になってしまった山肌を良く覚えている。その跡地には、すべてカラマツが植林され、広葉樹林は全部カラマツの人工林に変えられてしまった。単純そのもののカラマツ林床にアツモリソウが生き残れるわけがない。さらに、追い討ちをかけるように、戦後の経済発展によりもたらされた、園芸アツモリソウブームによる強欲な山採り、盗掘の横行でアツモリソウの自生地は壊滅されてしまったといえる。

古来、中国大陸と陸続きであった日本列島には、ヒマラヤ山地から連なる日華区系に生育する植物が豊かに生育していたはずである。チベット東域、中国雲南

省のミニヤコンカ山の谷深い地でみたアツモリソウ *Cypripedium tibeticum* の濃紫色の花が、釜無山中に咲くアツモリソウの花にそっくりだったこともそれを裏付けるものと思われた。

釜無のアツモリソウは、この地域で生育し続けてきた歴史を余すところ無く反映している。長い時間をかけ、この地域の気候風土に適応した特徴が見られ、すぐれた自然遺産であり、この地の宝物でもある。

それを思うとき、我々がこの20～30年のほんのいつかの間に、その貴重な種を絶滅させてしまうことは大変なことで、責任重大である。

この地の生態系に生きる人間として、この地のアツモリソウを保護、保全していくことは、自らの命を育み守るうえでも、どんなに重要なことであるかは言うまでもないことである。

ま と め

人生も後半になると、自らが歩んできたあとを振り返ることが多くなる。植物に学び、植物に教えられることも多くなるものである。不遜にも、芭蕉の名言「松のことは松に習え」の意味がいくらかわかってきたようにも感じられる。

細々と始めたアツモリソウ保護の取り組みも、多くの仲間との共同の取り組みとなり、大きな進展が得られるようになった。

釜無の山中に残り残ってきたアツモリソウも、庭先で昔から咲くアツモリソウも、この地域で生き続けてきているものは、みなこの地域の共有の宝物であり、大切に保護保存しなければならない。これを身をもって学ぶことができた。

2007年には、新たな自生株も確認され、シカ害対策も進んでいる。庭の花から採取された種子の無菌培養



鋸岳・釜無渓谷

苗も大量に成長している。小中高校での保護学習も始められ、町のアツモリソウ保護条例も施行され、保護監視員による監視活動も毎日行われている。明るい展望も見えて来ているが、本番はいよいよこれからで

ある。

アツモリソウが釜無・入笠山にはむろん、民家の庭先にも咲き続けることを心から願うものである。